

独断

注目商品

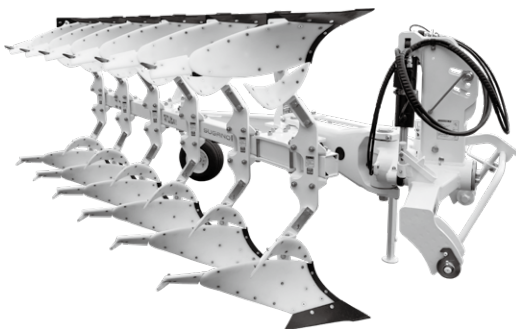
REVIEW

土の移動が少なく面積をこなせる 強粘土の水田ユーザー待望の一台

ボトムプラウ

浅耕タイプリバーシブルプラウ

R125/126 AAC



◆問い合わせ先
スガノ農機株式会社
〒300-0405 茨城県稲敷郡美浦村間野天神台300
TEL : 029-886-0031
<https://www.sugano-net.co.jp>

プラウの特徴は「深耕、反転・鋤き込み耕ができる」こと。長年そのメッセージを掲げてきたスガノ農機が「浅耕プラウ」を発売した。12インチの反転性に優れるY Pボトムを採用したシリーズで、5・6連は丘溝兼用、7・8連は丘曳き専用だ。1994年に発売した水田用（田畑輪換用）プラウにも12インチボトム（全長の短いYタイプ）を採用しているが、今回「浅耕」というコンセプトを打ち出したのは、実に興味深いと

ころである。

「深耕」の意味を改めて考え直すきっかけにも

開発意図は、経営面積が増える水田経営で効率的な耕起作業を行うこと。そのためどんな土壌条件でも耕深12〜18cmで土壌条件を選ばずに安定した反転性能を発揮することだ。そして、プラウ耕からレベラー整地までの作業を効率よくこなすためには多連で作業幅を稼ぎたい、という現場の声に応

えたのが浅耕プラウである。プラウ耕は、長らく「深耕」とセットで語られてきた。しかし、圃場によっては「深く耕せばいい」というものではないという声が聞こえてくる。例えば、合筆をする場合には盛土と切土を埋めるために、最低でも14インチ以上のボトムが必要という。緑肥を鋤き込んだり、雑草や野草等の種を埋没させたりする際には、深さ20cm以上の下層がターゲットになる。当然、浅耕では代替できない。

しかし、重粘土の水田で奮闘しているユーザーらは「合筆後は土の移動を最小限に抑えたい」「浅く起こして、レベラーも2回くらいクルクル回って、さつさと終わらせたい」と語る。「例年、圃場づくりをしてきた圃場は平らに仕上がっているため、敢えて深く起こしてボコボコにしたくない」という話も聞いた。どういう圃場を指して、どの作業を選ぶのか。プラウで耕するのが目的ではなく、目的や後工程までを熟慮すれば、複数のプラウを装備し、目的や圃場条件によって使い分ける意味も出てくる。

耕作面積が増えると、深く起こ

す圃場もあれば、浅く起こして作業効率を優先する圃場もつくらなければ、労働力がいくらあっても間に合わなくなる。水田用プラウの発売以来25年間で、プラウ耕や乾田直播を実践する農業者が増え、地耐力のある水田では農機の大形化が進み、100馬力超えのトラクターも珍しくなくなった。多連のプラウが活躍できる環境が整ってきたことも後押ししている。

ロータリー作業の代わりに
混和作業をも担えるか？

ところで、浅耕プラウには反転耕以外に、表層の残渣物や丈の短い緑肥を土と混和する作業も期待されている。その目的では、水田に限らず畑にも活躍の場は広がるだろう。7連、8連は丘曳き専用で、面倒な調整が要らないという点も強みだ。これまでロータリーで片付けてきた作業を引き受けられるのか。トラクターや畑作用作業機は海外からの輸入品も台頭しているが、耕深20cm以下の浅耕に適したプラウの海外品は届いていない。ぜひ実際に現場で使ってみて、議論を深めていただきたい。

（加藤祐子）